

対話の構造

—E-S モデルの観点からみた、対話における二つの軸—

藤本 航平

1.はじめに

対話とは何であろうか。また、対話に関する理解は、臨床実践において、どのように役立てられるであろうか。対話というものの定義は、分野や論者によっても様々である。最も広い意味としては、例えば認知科学における「話題を共有する」というものが挙げられるだろう。藤本(2021)は、認知科学的な観点から、上記のような「話題を共有する」という意味での、広義の対話に関して説明している。その詳細な説明は次節に譲るが、藤本(2021)の研究では、以上のような意味での対話について考察しており、その知見は対話の構造自体を意味的な観点から明らかにしている側面があると考えられる。しかし、その研究はむしろ話者間の認知的、あるいは言語的な傾向の違いにより発生すると考えられる対話の問題について主に焦点付けて論じるものとなっており、特に認知的な傾向が極端であると考えられるASD(自閉スペクトラム症)者に関する対話の問題について考察することに主眼が置かれている。よってその内容は、ASD理解における新たな視点を提供するものであると考えられるが、一方で上記のような広義の対話という観点からみれば、その中のある特定の問題を扱うということに留まっていると考えられる。

しかし既に述べたように藤本(2021)の研究は、主なテーマとしては扱っていないものの、対話自体の構造を意味的な観点から明らかにしている側面がある。よってその観点に着目するならば、広義の対話というものの自体について考察していく上で有用な知見であると考えられる。藤本(2021)の知見は、人間の認知に関連した二軸の言語的傾向について明らかにしているものである。もしも対話ということ自体を主なテーマとし、意味的な観点から対話の構造のモデル化が可能であるならば、それは対話の内容から話者の認知的な傾向、意味的な側面に関するアセスメントを可能にするような、臨床実践上でも役立つような知見となる可能性があると考えられる。このような観点から、本論では、意味的な観点から話者のアセスメントが可能となるような対話の構造のモデル化を目的としながら、藤本(2021)の知見を捉えなおし、話題を共有するという、広義の対話というものについて考えていきたい。

2.認知科学的観点からみた対話

上記の目的をもって広義の対話について考えるにあたって、藤本(2021)のまとめている認知科学における対話に関する知見を追う形で、まずは認知科学において対話がどのようなものとして捉えられているのかについてみていきたい。まず、前提として、認知科学の領域では近年、

人には「速い思考」と「遅い思考」という2つの判断のシステムがあるとされる(Kahneman,2011)。「速い思考」とは、高速・自動的に動き、意識的な努力が比較的不要な思考のことである。「遅い思考」とは、例えば複雑な計算など、頭を使う感覚を伴う、注意を伴う知的活動である。そして篠原(2019)は、この2つの判断システムを日常会話に関連付け述べている。例えば意識的に慎重な判断を必要としない日常における対話(会話)は、基本的に「速い思考」により行われているとのことである。いわゆる直感というものも、この「速い思考」の働きに含まれ、目の前でなされている話の展開が自身の経験から予想がつく限り、基本的に人は直感的に対話を行おうとのことである。また甲田(2016)は以上のような対話における直感的に話題を移る際の方略として、話者間の知識内の語同士の意味的関連性を基盤として非明示的・自動的に話題を移っていく方略を挙げている。そしてその方略について、話者間の知識内にある語同士の意味的な繋がりにより、互いに話の展開を予想することで、無意識的にスムーズな対話の展開が可能となっているのではないかと述べている。

以上のような知見を踏まえた上で、藤本(2021)は、そのような語同士の意味的な関連性は、話者間の知識内における概念間のつながりとして考えられるとした上で、そのような人の知識内の概念のつながりに関する知見として、活性化拡散モデルを紹介している。活性化拡散モデルにおいては、各概念はネットワークの中で連結点(node)として表され、各連結点はそれぞれリンクで連結されているとされる(Collins and Loftus,1975)。そしてある概念に関連した情報の検索は、このリンクをたどることによってなされる。このモデルでは、リンクの繋がりにおいて概念間に異なる接近可能性があると考えられるが、この接近可能性は、人がそれぞれの概念を考えたり用いたりする頻度や傾向により決まるとされていることから、個人によって異なるとされる(Collins and Loftus,1975)。

藤本(2021)は、活性化拡散モデルに触れた上で、対話においては、話者同士の概念間のリンク付けのされ方が類似しているならば、それだけ「語同士の意味的な関連性」を用いた自然な話題の移り変わりが可能であることが考えられると述べている。そして逆に話者同士の概念間のリンク付けのされ方が異なれば、自然な話題の移り変わりがなされなくなる可能性についても述べている。そして概念間のリンクは個人ごとの言語的な志向性により形成されると考えられるため、もしも話者間で言語的・認知的な傾向が異なれば概念間のリンクの在り方も異なり、結果的には、「自然な」話題の移り変わりは阻害されることにもなり得ることを対話の問題といった観点から、述べている。

以上のように、認知科学の観点を概観した藤本(2021)の述べるところによれば、対話は話者同士の言語的傾向の近さにより「自然と」行われるということが考えられるということである。言語的傾向が近いと、話者同士が無意識的に話題を共有し、話題を移りやすいと考えられるからである。また、話者同士の認知的、あるいは言語的傾向の違いは、直感的感覚を伴う対話を阻む要因にもなると述べられている。藤本(2021)によると、「話題を共有する」という広い意味での対話プロセスにおいては、話者間の認知的、あるいは言語的傾向の違いは、そこで生じる話者間の対話に関する主観的な体験にも影響する要因となり得るということである。

以上が、認知科学における知見と、それらを概観した藤本(2021)の論考により浮かび上がる、意味的な観点からみた対話の構造である。藤本(2021)は以上の内容に関して、研究の目的上、特

に対話の構造について注目して述べていたわけではない。しかし、本論の第一節にて述べたように、その点に着目することで得られるものもあると思われる。以下、これを踏まえ、藤本(2021)を更に詳細に検討しつつ、対話の構造について考察していきたい。

3.E-S モデルに基づく人間の認知的・言語的傾向

以上、認知科学の観点から、話題を共有するという観点における対話の構造を概観してきた。以上の観点からは、話者の言語的・認知的な傾向によって、概念間のリンクの仕方が異なり、話題の移り変わり方も変化すると考えられた。ところで、話者の言語的・認知的な傾向とはどのようなものであるか。藤本(2021)はまた、言語連想法を用いた量的研究により、共感—システム化(Empathizing - Systemizing; 以下 E-S)モデル (Baron-Cohen, 2008)という、人間の認知を二軸で示すモデルに対応した二種類の認知的傾向の強弱によって、人が用いる言語の意味的傾向が変化することを示した。Baron-Cohen et al.(2003)によると、共感とは自然と他人の気持ちや感じ方を特定し、適切な感情で反応しようとするをいい、システム化とはシステムを理解したり、構築したりしようとするをいう。また Baron-Cohen& Wheelwright (2004)はシステム化におけるシステムを、インプット-作用-アウトプットという関係で表せるような、規則に従うものを指すと説明している。なお、Baron-Cohen& Wheelwright(2004)は統計的な研究によりこれらの認知システムの傾向が男女間で異なることを示しており、Baron-Cohen(2008)は ASD 者と定型発達者間で異なることを示唆していることから、男女差や ASD に関する研究で取り上げられることもあるモデルである。そのような文脈もあり、藤本(2021)では主に ASD 者の問題を論じる上で E-S モデルに関する量的研究を行った。しかしその量的研究は一般の大学生を対象としており、人間の認知一般を考える上でも役立つと考えられることから、本論ではその結果を人間一般の言語的・認知的な傾向を示す結果として引用している。藤本(2021)の量的研究の結果としては、具体的には、システム化の認知的傾向が強いと、人は「カテゴリ関係」という意味的関連性をもって言語を用いるというものであった。そして反対にシステム化傾向が低いと、人はより「形容詞・動詞」を用いた言語運用を行うというものであった。また、共感の認知的傾向が弱い場合も、人はより「カテゴリ関係」という意味的関連性による言語運用を行うということであった。ここでいう「カテゴリ関係」とは、例えば「犬」と「動物」との関係といったような、意味的・概念的に包摂関係を形成する関係のことであり、概念間を移動するような意味的関連性と考えられた(藤本,2021)。また、システム化と共感の傾向を測る質問紙による調査を行った先行研究や藤本(2021)の結果からは、以上の二つの認知的傾向を表す質問紙の得点には相関関係がみられず、二つの認知システムは、それぞれ独立したものであることが示されている。これらの知見を、第二節においてみてきたような認知科学における対話の構造と照らし合わせて考えると、E-S モデル的観点から、人は対話において、「システム化」という認知的傾向に影響されて言語を用いる軸と、「共感」という認知的傾向に影響されて言語運用をしようとする、独立した二つの軸を認知的にもっていることが浮かび上がってくるのである。

4.E-S モデルに基づく対話の構造

それでは第二節において示された、認知科学的観点からみた対話の構造と、第三節において示された、E-S モデルに基づく二軸の認知的傾向と意味的な側面における言語運用傾向との関係についての知見を統合していきたい。以下、意味的な観点からみた対話の構造に関するまと

めとして、藤本(2021)で内容的に示唆されてはいたけれども、その研究の目的上なされなかったモデル化を図を用いて試みていきたい。第二節において示された、認知科学的観点からみた対話の構造を図1に示す。また、第三節において示された、E-Sモデルに基づく二軸の認知的傾向と意味的な側面における言語運用傾向との関係について、図2に示す。

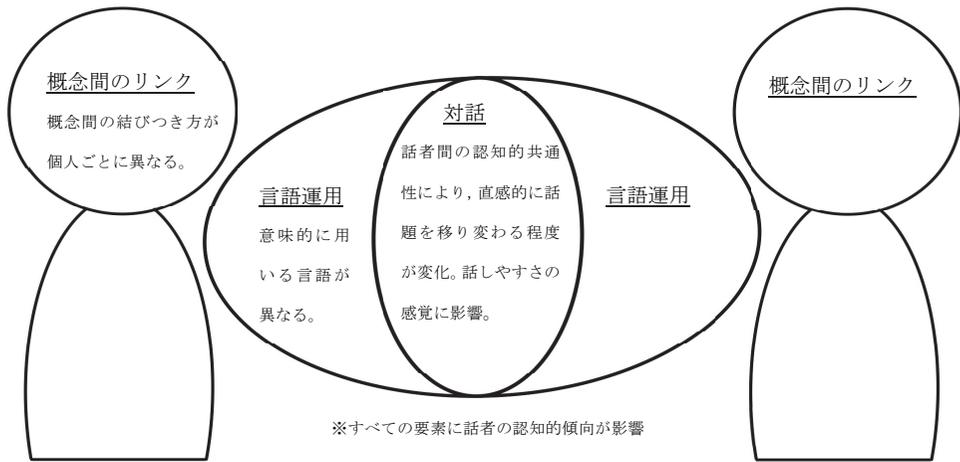


図1 認知科学的観点からみた対話の構造

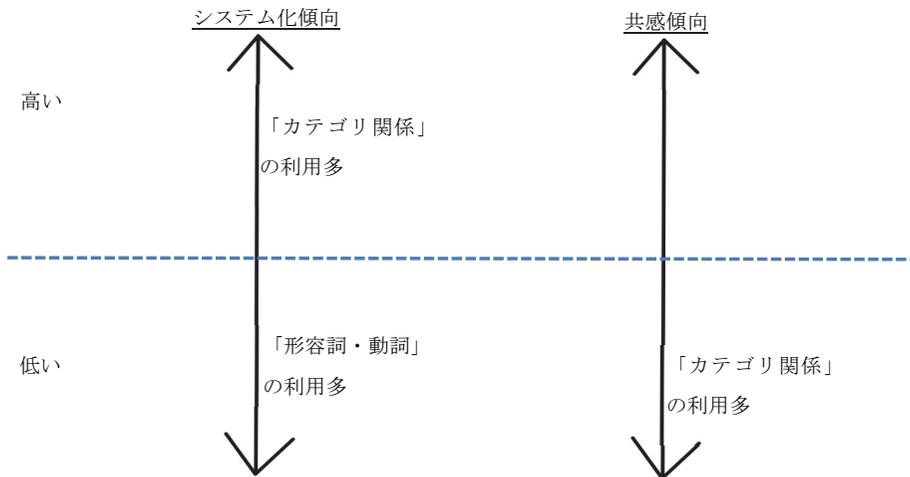


図2 E-Sモデルに基づく二軸の認知的傾向と意味的な側面における言語運用傾向との関係

図1に示されたように、まず個人内ではそれぞれ認知的な傾向に基づき概念間のリンクが形成され、言語運用傾向が形成される。他者との対話においては、相手も同様にその認知的傾向により概念間のリンク、そしてそれに対応する言語運用傾向が形成されている。二者間の対話においては、自身と相手の認知的傾向、そして結果的にそれが形成する概念間のリンク、そしてそれに対応した言語運用傾向の共通性によって、直感的に、Kahneman(2011)の言葉を借りれば「速い思考」による話題の移り変わりがなされる程度が変化すると考えられる。藤本(2021)は、それにより話者が主観的に感じる対話のしやすさの感覚も影響を受け、「話題がスムーズに移り変わらない」と話者たちに感じられるという意味での対話の問題が生じる可能性についても言及している。いずれにせよ、図1が示すのは話者の認知的な傾向が対話に影響を及ぼす構造を段階的に示した図と考えられる。

そして図1において概念間のリンク、言語運用、対話といったすべての要素に関係すると考えられる認知的な傾向の影響の詳細については、図2において示されている。これはE-Sモデルの観点からみた場合の、対話に関する意味的な構造ともいえるだろう。このモデル図は、例えば図1における話者内の概念間のリンクや、言語運用、対話の内容についての情報が得られた場合に、その内容から話者の認知的な傾向についてアセスメントすることに役立つと考えられる。具体的には、ある話者から得られた情報の内容が意味的に「カテゴリ関係」で関連している割合が高いならば、認知的にはシステム化の傾向が強い共感の傾向が低い可能性がある。また、「形容詞・動詞」の利用、あるいは形容詞的・動詞的な意味的関連が多いならば、認知的にはシステム化傾向が低い可能性が考えられるだろう。

以上、第一節、第二節の内容に基づいて、対話の構造についてのモデルを二つの図により示した。藤本(2021)の内容を検討し、認知的な傾向が対話に影響を及ぼす構造、E-Sモデルからみた場合の対話の意味的な構造という2つのモデル化を行うことで、アセスメントの視点で臨床実践にも応用が可能な知見を具体的に得ることができた。

5.対話とは何か

以上のように、対話の構造のモデルを二つの図により示すことができた。以下、それらから見えてくる、対話というものについてさらに詳細に考えていきたい。二つの図により示されたモデルから見えてくるのは、話題を共有する営みとしての広義の対話とは、対話を構造的に構成する要素、つまり話者に内在する概念間のリンクや、言語的に示される言語運用の在り方から、時に直感的に話題を移ることが難しいと感じられるような対話における主観的な体験に至るまで、それらすべてにおいて、話者の認知的な傾向を内容的に映し出しているものとして捉えられるということである。このことは、第四節にて具体的に述べてきたことに加えて、臨床の実践においても有用な考え方ではないだろうか。なぜならば、ここでいう対話の構造を、セラピストとクライアントが言語的にエピソードを共有しようとする場面に当てはめて考えるならば、セラピストにとって、クライアントの頭の中にある概念のつながり、言葉の使い方や、そのエピソードを共有しようとする際の主観的な体験、例えば理解が直観的にできる感じなどの情報すべてが、クライアントの認知的な傾向や、自身との認知的傾向との違いの程度について、言語的・意味的な側面から具体的にアセスメント可能な情報となるからである。E-Sモデルの観点からすれば、それらの情報は、クライアントのシステム化、共感の認知的傾向を示し

うる情報であり、クライアントがどの程度ものごとを法則だてて考える傾向があるか、あるいは他者の気持ちや感覚に共感的な傾向があるかなどといったことを提供する情報となるのである。いずれにせよ、本論においては、対話とはそれを構成する要素に表れる意味的な側面や、あるいはそこで生じる主観的な経験などといった様々な点から、話者の認知的な傾向を具体的に表しうるものとして捉えられる。

6.おわりに

本論は主に、藤本(2021)を参照しつつ対話の構造のモデル化を行うにあたって、藤本(2021)では ASD における問題に特化して述べられていた内容を、対話一般の定義について考察可能な知見として捉えなおした。具体的には、本論は言語的な意味関連や対話における主観的体験から個人の認知的傾向を得ることができる可能性についての知見を示すものとなった。また、その知見に付随して、臨床実践上有用と考えられるような対話の定義に関する考察もなされた。それは具体的には、対話とはそれを構成する要素において認知的な傾向を内容的に反映するものとして捉えられるというものであった。

以上の知見に関しては、対話とは話題を共有する営みであるという定義上の前提があったが、言語をひとつの表現と考えるならば、同様の構造をイメージを共有する営みについてもみることができると考えられる。つまり広義の対話を、話題を共有する営みとするならば、例えば臨床場面における描画法などは、絵というイメージを共有する営みとして、同様の構造をそこに想定できる可能性はないだろうか。描画を書く者の頭の中にある概念間のリンクや、描画に表現される意味の関連性、あるいはセラピストにおける、描かれる描画が直観的に理解できるかどうかといった主観的な感覚などから、同様に表現する者についての認知的な傾向についての情報が得られる可能性も考えられるのではないだろうか。その仮説を検証するためには、今後、言語的な意味関連と、イメージ的な表現内容との関係についての知見の蓄積が必須であると考えられる。また、本論において図2で示されたような、認知的傾向と意味的な傾向との関係については、E-S モデル以外のさまざまな側面からも検討していくことで、上記のアセスメントはより繊細に、そしてより様々な側面から行われうるものとなると考えられる。また、「カテゴリ関係」に基づく言語運用、そして「形容詞・動詞」を多用するような意味的傾向とは本質的にどのようなものかということに関する詳細な検討も、上記のアセスメントの質を向上させ、より有効なものとしていく上では重要であろう。それらは今後の課題として残されている。

文献

- Baron-Cohen, S. (2008). *Autism and Asperger syndrome*. Oxford University Press. 水野薫・鳥居深雪・岡田智(訳)(2011). *自閉症スペクトラム入門—脳・心理から教育・治療までの最新知識*. 中央法規.
- Baron-Cohen, S., Richler, J., Bisarya, D., Gurunathan, N., & Wheelwright, S. (2003). The Systemizing Quotient (SQ) : An investigation of adults with Asperger syndrome or high functioning autism and normal sex differences. *Philosophical Transactions of the Royal Society, Series B, Special Issue on "Autism: Mind and Brain"*, **358**, 361-374.
- Baron-Cohen, S., & Wheelwright, S. (2004). The Empathy Quotient: An investigation of adults with Asperger syndrome or high functioning autism, and normal sex differences. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **34**, 163-175.
- Collins, A. M., & Loftus, E. F. (1975). A spread-ing-activation theory of semantic processing. *Psychological review*, **82**(6), 407.
- 藤本航平 (2021). 自閉スペクトラム症者の対話の問題に関する新たな展開—言語的傾向の違いから対話的共生を考える—。 *社会言語科学*, **24**(1), 83-92.
- Kahneman, Daniel (2011). *Thinking, Fast and Slow*, Penguin Books. 村井章子(訳)(2014). *ファースト&スロー*. 早川書房.
- 甲田直美 (2016). *焦点連鎖の認知プロセス*. 山梨正明・吉村公宏・堀江薫・榎山洋介(編). *認知日本語学講座第5巻*, くろしお出版.
- 篠原俊吾 (2016). *選択の言語学*. 開拓社.

(臨床心理学コース 博士後期課程2回生)

(受稿 2020年8月31日, 改稿 2020年11月7日, 受理 2020年12月3日)

対話の構造

—E-S モデルの観点からみた、対話における二つの軸—

藤本 航平

本論文は先行研究の内容的な検討を行い、認知科学の観点から対話の構造をモデル化することにより、話題を共有するという広義の対話について考えると共に、意味的な観点から話者のアセスメントが可能となるような、臨床の実践において有用な知見を得ることを目的とした。その結果、対話とは、話者の内にあると想定される概念間のリンクや、言語的に示される言語運用の在り方に表れる意味的な側面や、対話がスムーズであると感じられるかどうかといった主観的な体験などの様々な要素により、話者の認知的な傾向や、話者間の認知的な傾向の差を具体的に表しうるものとして捉えられた。そして E-S モデルに基づいた構造モデルを作成することで、臨床実践において、話者の意味的傾向から認知的傾向を具体的にアセスメントすることが可能な知見が体系化された。

Structure of dialogue: two axes of dialogue from the viewpoint of the E-S model

FUJIMOTO Kohei

This paper models the structure of dialogue from the viewpoint of cognitive science by examining the contents of previous research. The purpose is to consider the dialogue and to obtain useful knowledge in clinical practice to allow meaningful assessment of the speaker. The results showed that dialogue is composed of various factors, such as links between concepts that are assumed to be within the user, the meaningful aspects of linguistically indicated state of language operation, and subjective experiences, such as whether the dialogue feels smooth. In addition, dialogue was defined as a concrete indication of the differences between the cognitive tendencies of the speakers and the cognitive tendencies between the speakers. A structural model based on the E-S model was made. In clinical practice, it is possible to concretely assess cognitive tendencies from the meaningful tendencies of the speaker.

キーワード：対話、E-S モデル、アセスメント、言語、認知

Keywords: dialogue, E-S model, assessment, language, cognition